研究

「天草版平家物語」の敬語法について

川畑淑子

序

「天草版平家物語」は、一五九二年（文祿元年）天草学林で日本人イルマン・不干ハビヤンが編者となり、完成したローマ字本である。

聞き手に右馬の允、語り手に喜一検校という仮空の人物からなる対話形式をとり、「平家物語」十二巻を四巻に縮め、「平家興亡」を中心として物語は展開している。

「平家物語」の数多い異本のなかから「天草版平家」が底本とした「原平家」は、巻一が「一方系本」（覚一別本）、巻二以下は、「百二十句本」の本文に近い。これらの「原平家」を底本として、「両人相対して、雑談をなすがごとく、ことばのてにはを書写せよとなり。」「この物語を力の及ぶところは本書のことばをたがへず、書写し、抜書となしたるものなり、」（序文四ペ）という両面を「口語教科書」「歴史教科書」という成立目的のもとに達成させるため、表現上の相当の苦心が考えられる。

このような諸点のもとに口語訳された「平家物語」は、先学により各種研究がなされているが、なお幾多の研究課題を蔵している。

本研究は、「敬語法」をとり扱うものである。宣教師の「懺悔をきくこと、説教をすること云々。」の任務は、日本人としての「正しい話しことば」のもとになされるべきである。それは、あらゆる階級の人々の間でおこなわれ、そのため、敬語法を学ぶことは、不可欠の問題にちがいなかった。

テキストは、亀井高孝、阪田雪子翻字「ハビヤン抄、キリシタン版平家物語」（吉川弘文館）、「原平家」は、山田孝雄校訂「平家物語」（岩波文庫）を用いた。

敬語法の分類は、諸説があるが、「尊敬、謙譲、丁寧」とする分類によることにした。

なお本稿は、先に提出した卒業論文、第一章の「原平家」との対応部分のみであり、各敬語も、その代表的なものに限った。

第一章　「原平家」との対応関係からみた「天草版平家」の敬語法について

「天草版平家」と、その底本である「原平家」との対応関係について調査し、「天草版平家」における敬語法の位置を知ろうとするのが本章の目的である。

ここでは、「天草版平家」巻一と、「覚一別本」との対応部分についておこなう。

第一節　尊敬語法

(一)、る・らる

「天草版平家」において、「る・らる」は、約三〇〇例用いられている。この使用数は、口訳者が、物語の登場人物に用いているものと、登場人物の間で話される会話を口訳者が語る部分に用いているものとにわけられる。ここでは、前者を、地の文とよび、後者を、会話文とよび、それぞれを区別して考察することにする。まず、地の文から述べる。

a、地の文

地の文における「る・らる」は、約二六八例用いられている。さて、「原平家」との対応を示せば、表(1)のとおりである。

表　(1)

原平家＼天草版平家	る・らる
る	61
らる	33
給ふ	83
敬語動詞	67
なし	24

表(1)からわかるように、「天草版平家」の「る・らる」は、「原平家」の「る・らる・給ふ」および、「敬語動詞」と対応している。まず、「原平家」の「る・らる・給ふ」との対応例を示せば、次のとおりである。

例一、天草版平家（原平家）（以下「(原)」と記す。）（天）（以下「(天)」と記す。）

面目なさにかひそかにまかりいでらるるとて、横たへてさされたかば……（四五ペ）

（脱出らるる）（よこだへさされたりける刀を）の刀を…（七ペ）（一線は筆者、以下同じ）

例二、(原)、(天)、大納言の北の方は成親卿の北の方はこの世にない人と、聞給ひて……（二二九ペ）

…（五五ペ）

敬語動詞との対応には、会話文の結びの部分で、「原平家」の「…と宣へば」を「…と言はれたれば、」に改めている例が四一例あり、他には「おはしけり」「召す」を「るられた」などがあげられる。

「口氏大文典」[注一]によれば、「る・らる」は、「話しことばと書きことばにおいて用い、」（五七九ペ）「給ふ」は、「書きことばとして使はれる。」（五八四ペ）とある。この説明から考えあわせて、ほぼ「天草版平家」は、口語調であり、「原平家」は、文語調であると言えよう。

次に、主な登場人物について、「原平家」の「る・らる・給ふ」との対応関係をみると、表(2)のとおりである。巻一は、清盛の威勢栄華のことから、資盛の関白殿への狼藉、成親媒妁、重盛の小教訓、少将などの流罪のこと、俊寛のことなどが語られる。そのため、登場人物の範囲が、それ程広くなく、平家方も清盛など、数人に限られている。

表　(2)

人物＼原平家＼天草版平家	る・らる	給ふ
忠盛	7	—
清盛	15	9
教盛	13	2
重盛	20	6
成親	21	21
成経	21	23
成親の北の方	3	5
成親の幼き女人	—	2
少将の幼き女人	—	2
俊寛	4	6
殿上人	4	—
女房	5	—
人々（侍）	5	1
漢王	3	—

「る・らる」の用いられる登場人物は、清盛・重盛などから、女房・侍にまでおよぶ。宮中関係者には一例もない。以上のことから、「る・らる」の敬意度が、それ程高くないこと、身分の高い人には用いないことなどが、ほぼ、予測できよう。事実、「口氏大文典」によれば、「普通に最も低い程度の敬意を動詞に添へるのはこの助辞を用ゐて話す場合である。」(五八一ぺ)とある。この「る・らる」を、一代の英雄といわれた清盛に用いていることになろう。この事実は、清盛が乱暴な政治をおこない、悪評をかった描写を語り手が強調していると思うのである。この点からも、清盛に対して、敬意度のそれ程高くない敬語を用いている口訳者の態度がうかがわれよう。

b　会　話　文

会話文の「る・らる」は、地の文の約十四パーセントになっている。三五例である。地の文が約二六八例と圧倒的におおいのに対し、これは極端にすくなくなっている。この事実は、次項に述べる「せらる・させらる」が、逆に、地の文にすくなく、会話文におおいことを考えあわせると、興味ある現象であると思われる。

使用数と人物関係については表(3)にしめすとおりである。この他に、「天草版平家」だけにあるもの、八例(「…おほせつけられて」(重盛→清盛(清盛のこと))「…とくはたてられた。」(清盛→教盛(成親のこと))は、「原平家」の「おほせつけて」「企てあり。」の形で用いてある。)表現のことなる例八例(「…集めらるる」「難かるる」は、「原平家」の「召され候」「難き申候」と対応している。)などがあげられる。

主な人物の敬語については、表(3)にあげた以外の敬語もあわせ用いられている。従って、次項の「せらる・させらる」とあわせ考えてみる必要があろう。

表　(3)

話し手→聞き手	話　題	天草版る・らる	原平家 る・らる	原平家 給ふ
重盛→清盛	清盛のこと	1		—
重　盛	〃	—		1
成　親	〃	1		—
教盛→清盛	〃	1		—
教盛→成経	〃	—		1
盛国→重盛	〃	2		—
教盛→重盛	〃	1		—
清盛→盛国	院中の人々	—		1
成経→乳母	成　親	—		1
成　経	〃	—		1
重　盛	〃	1		—
貞能→重盛	重　盛	—		1
侍　共	〃	—		1
法　皇	〃	—		1
重盛→侍	幽　王	—		2
重盛→侍	幽王の后	—		2
有王→乞食	俊　寛	—		1
成親の北の方(文)	成親の幼い人	—		1

せらる・させらる

「せらる・させらる」は、地の文十五例、会話文五七例で、ともに用いかたが異なる。

a、地の文・

「原平家」との対応をみれば、「せ給ふ・させ給ふ」と、ほぼ対応し、用いられる階層も身分の高い者に用いられている。ただ、「天草版平家」の「せ

表　(4)

人物＼天草版	せらる・させらる	原平家 給ふ	せ給ふ	させ給ふ
法　皇	—	8	3	
関白殿	—	1	—	
成　親	1	—	—	
入道の姫君	1	—	—	
入道の姫君・後建礼門院	—	1	—	

らる」が、「原平家」の「給ふ」と対応している例が二例みられる。この二例は次の理由により例外と考えてよかろう。すなわち、成親に対する尊敬語は、「る・らる」三八例で、これは、「原平家」の「る・らる・給ふ」に対応している。いま、「せらる・させらる」が用いられている部分を検討してみよう。

例三、（原）…大納言（天）…車をよせてとうとうと申せば、心ならず乗らせられたを軍兵ども…（四六ぺ）成親が流される場面である。成親にとって、もっとも悲惨な事態であろう。従って、語る者の同情をかうに十分である。「天草版平家」の口訳者は、成親に対する感情を「せらる」で表現したものと思われる。ここに、口訳者の感情の介入により、尊敬語の用いかたに違いがあると考えられるのである。

次に、清盛の姫君に用いてある例を述べる。

例四、（原）…其外姫八人おはしき。（天）…姫君も八人までござったが、特とり面々みな縁につかせられた。そのうちに一人は后に立たせられて、王子御誕生あり、皇太子に立たせ給ふ。皇子を御誕生あってのち、位につかせ給しかば、院号かうぶらせ給ひて建礼門院とぞ申ける。（五一ぺ）

「原平家」においては、清盛の姫君と、姫君が嫁いだ後の身分、すなわち、建礼門院とは、尊敬語の用いかたにちがいがみられる。これは、宮中関係者とそうでない者との敬語の使いわけをおこなっていることになる。「天草版平家」の口訳者は、「原平家」のこのような使いわけに気づいたであろうか。気づきながら、両者に「せらる」を用いたと仮定すれば、一代の英雄であった清盛の悪評は、姫君には、関係ないとみて、「せらる」一本でとおしたとするのは考えすぎであろうか。以上述べた理由により二例を例外とみたい。

b、会　話　文

ここで称する「会話文」は、聞き手と話し手が直接相対して話すことから相手を意識する。その意識が敬語を左右すると考えられる。それらを考えあわせて「る・らる」との比較もおこない、登場人物についての尊敬語法の諸相をみたいと思う。表(5)は、人物関係と、「原平家」の対応とあわせて表示したものである。表(5)から次のことが注意されよう。

一、話し手、聞き手のちがいによらず、宮中関係者に用いている。「口氏大文典」によれば「せらる・させらる」は、「話しこと

表 (5)

話し手→聞き手	話　題	天草版せらる・させらる			
		原　平　家			
		る・給ふ	せらる	せ給ふ	させ給ふ
重　盛→清　盛	法皇のこと	—	1	2	1
清　　盛	〃	—	—	1	—
清　盛→貞　能	〃	—	—	1	1
西　光→清　盛	清　盛	1	—	—	—
重　盛→清　盛	〃	2	—	—	—
重　　盛	〃	—	—	—	2
重　盛→清　盛	成　親	1	—	—	—
清　盛→成　親	〃	1	—	—	—
俊　寛→成　経	成　経	1	—	—	—
乳　母→成　経	〃	—	—	3	1
福原の使→成経	〃	—	—	—	1
兵→成親の奥方	成経達	—	—	—	1
兵→成親の奥方	成親の奥方	—	—	1	—
使いの供の者→島の人々	俊　寛	1	—	—	—
成　経→俊　寛	〃	1	—	—	2
有王→俊寛の女	〃	—	2	—	1
有　王→俊　寛	〃	—	—	—	3
有　王→俊　寛	俊寛の幼き人	—	2	—	—
有　王→俊　寛	俊寛の北の方	—	5	—	—
俊寛の北の方→俊寛(文)	俊　寛	—	1	—	—
成経→成親（墓前）	成　親	2	—	—	—
成経→成親（成親の家前）	成　親	—	1	—	2

ばにおいて、最も高い敬意を示す。」（五七九ペ）、「せ給ふ・させ結ふ」は、「書きことばにおいて、最も高い程度の敬意を示す。」（五七九ペ）とある。この説明からも解されよう。

二、臣下が主人に、主人の近親者に、目前にいる時といない時にかかわらず用いる。

例五、（原）…（天）…幼い人はあまりに恋ひこがれさせられて…とむつからせられたが、（七六ペ）これは、有王が、主人である俊寛の近親者を最高に尊敬している。このような例は数例みられる。

…させ給ひて…　幼い人　せ給ひし…が…

三、話し手が聞き手のちがいにより、話題、場の雰囲気に左右されて用いる。これは興味深い現象であると思われる。例えば、清盛の場合をみると、「る・らる」で表現されている例が三一例みられる。従って、清盛に対しては、「る・らる」で表現されるのが自然である。ところが会話文に「せらる・させらる」で表現されている例が五例ある。さて、これと「る・らる」の用例と比較してみよう。

例六、（天）たとひ清盛いかなる不思議を下知せらるるとも、なぜに重盛に夢ほどなりとも知らせなんだぞ？（十七ペ）

例七、（天）いかにいはんや、先祖にもいまだ聞かぬ太政大臣をきはめさせられ、かう申重盛も愚かなる身にてござりながら…（四十ペ）

（原）…し給とも…　（原）…させ給ふ…　お ra

例六は「殿下乗合」の条で、重盛が清盛に立腹し、周囲の侍に語った会話である。例七は、成親の罪の許しを、重盛が清盛に懇願する場面である。成親への罰を軽くしてくれるとすれば「させらる」という最高敬語を用いても、おしくない重盛の心意であろう。この二例の比較によれば、明らかに重盛が清盛に対して心の変化が考えられる。このような例は「足摺の状」で、俊寛と少将の会話にもみられる。

次に「原平家」との対応をみれば、「せ給ふ・させ給ふ」とほぼ対応している。ただ、「る・らる・給ふ」との対応が数例みられる。これらは敬意度から考えて、「天草版平家」の口訳者が同等の敬意度と考えて用いたものとは考えられない。したがって、口訳者が、登場人物に「原平家」に用いている以上の敬意度をもつ「敬語」で語らせたものと考えられないであろうか。会話文に口訳者の感情が加わったといえるであろう。

第二節　謙譲語法

(一)、奉　る

巻一における「奉る」は五七例用いられている。「原平家」との対応は、「奉る」と三二例、「まゐる」と十六例、「申す」と一例、「上る」と一例、添加されたと思われる例三例などがあげられる。以下、地の文、会話文にわけて、簡単に述べたい。

a、地の文

表 (6)

○○から	○○へ	天草版	奉る
		原平家	
		まゐる	奉る
重盛	法皇	—	1
清盛	〃	1	—
成親	〃	1	—
侍	朝家	—	1
経遠兼康	成親	—	1
話者	〃	—	2
経遠	〃	—	1
信俊	〃	—	2
成経	教盛	—	1
兼康	〃	—	2
話者	成経	—	1
経遠	〃	—	1
有王	俊寛	—	2

人物と用例については表(6)に示すとおりである。

例八、(天)…と言うて、地へ渡し奉り、備前と…といふ山寺に おき奉った。(五十ぺ)

(成親卿)…皆奉る。　(原)…奉り…

例九、(天)、法皇を迎ひ奉らうずることをもはや思ひとどまり…(四四ぺ)

(清盛)　(原)…迎参らせん…

「口氏大文典」をみれば、「身分の低い者から高い人へ…多大の畏敬と丁寧さを示して、あり得る限りの最高度に謙そんの心持を表す。」(五八七ぺ)とある。

「原平家」との対応をみれば、「奉る」は、「原平家」の「奉る」「まゐる」とほぼ対応するが、「申す」「上る」などのように「奉る」と同じ機能をもつ謙譲語にも対応する可能性をもっているといえよう。

b、会　話　文

会話文の「奉る」は、三四例である。地の文よりやや多くなっている。この現象は、話し手と聞き手が目前にいることから話し手が聞き手を意識し、へりくだりの意味で用いるものであると思われる。「原平家」との対応は表(7)にしめすとおりである。

さて「奉る」の注意すべき用例を二、三述べてみよう。

例十、(原)…片、時も離れ奉らなんだれば、…諫められ奉ったおことばも、肝に銘じて片、時も忘れ奉らぬ。(五三ぺ)

(離れ参せ候はず。…　参らせ候はず。　…参らせし…　(信俊→成親の北の方、成親のこと、北の方のこと)

臣下が主人とその近親者に用いている例である。このような例は数例みられる。

例十一、(天)さござりともお命を失ひ奉るまではよもござあるまじい、…おん命にも代り奉らうずると言うて、(二八ぺ)

(重盛→成親、成親のこと)　…奉る…　…奉る

例十二、(天)、重盛が身にかへて申しなだめ、首をつぎ奉ったに、何の遺恨をもってこの一門を滅ぼさうずるとの企ては何ごとぞ、…しかれども当家の運がつきぬによって、迎へ奉った。(二五ぺ)

(重盛→成親、成親のこと)　(原)…たてまつった　…たてまつった

例十一は、成親の沈痛な心持を慰める会話である。重盛のいたわりが「奉る」により一層濃く感じられよう。例十二は、謀叛をおこした成親に清盛の立腹した状態である。やゝ皮肉な表現とうけとられよう。このように同じく、「奉る」を用いながら、話の内容、場の状況により用いられる価値が変化するものと思われる。

表　(7)

話し手→聞き手	話題	天草版　奉る	
		原平家	
		奉る	まゐる
清盛→貞能	法皇のこと	1	—
清盛→重盛	〃	—	1
重盛→清盛	〃	2	—
盛国→重盛	清盛が法皇のこと	—	1
清盛→資盛	関白殿	2	—
少将→女房	君	—	1
教盛→清盛	清盛	3	1
成親→重盛	重盛	1	1
清盛→成親	成親	2	—
宰相→成親の北の方	〃	1	—
成親の北の方→信俊	〃	—	3
信俊→成親の北の方	〃	—	2
信俊→成親	〃	—	1
重盛→成親	〃	1	—
少将→成親	〃	1	—
宰相→少将	少将	1	1
六条女房→少将	〃	1	—
清盛→教盛	教盛	2	—
少将→俊寛	俊寛	3	—

第三節　丁寧語法

(一)、ござる

使用数は、地の文九五例、会話文一一六例である。これは「原平家」に一例もみられない。「天草版平家」独得の丁寧語法といえるであろう。

a、地の文

まず「ござる」の用いられかたについて、文中、文末にわけて表(8)にしめす。表からわかるとおり、文末に用いられている例が過半数をしめている。

表 (8)

	使用数 文中	使用数 文末
…て（で）ござる。	—	28
…て（で）ござった。	6	29
…てござある。	—	1
…ときこえてござる。	—	10
…ときこえまうしてござる。	—	1
…うござる…	1	—
…うござった…	2	—
…はござなかった	—	9
…にもござない…	1	—
…はござなかったと申す。	—	2
…にもござっつらう	—	1

例十三、(天)…と、ある人の書きおかれたも、今目の前に知らる(原)…思しられけれ・る体でござる。（三一ぺ）

例十四、(天)…成親卿は私の宿意をしばらくはとどめられてござ(原…しばらくは抑へられけり。)った。（一九ぺ）

これらは物語が一くぎりついた所に用いられている。このように、物語に「しめくくり」をつける如くに用いられている例がおおい。「話し手」と「聞き手」を設定した口訳者は、物語を発展させていく上で全体的な安定を必要とし、文末に「ござる」を用いたものではないだろうか。

さて「原平家」との対応は、次の如くに分類される。

一、助動詞（けり・たりなど）と対応五二例。一例をしめす。

例十五、(天)…と言うて…守護の武士どももみな鎧の袖をぬらい(袖をぬらしける。)てござる。（一、二、一ぺ）（四六ぺ）

二、「天草版平家」で独自に添加している、十三例。口訳者が物語を進めながら、対応のないところに用いているものである。

例十六、(原…嘉応元年七月十六日、一院御出家あり。)(天)…嘉応元年のことでござったに、一院は御出家なされてござった。（十三ぺ）

この用例をみれば、対話性が生き生きと感じられると思うのである。

三、右馬の允と喜一検校との対話中に用いている、二〇例。

四、対応不明なもの、三例。

例十七、(原…されば…)(天)、このようにござったによって、平家の悪しいことども…（十二ぺ）

「このやうにござったによって」と「されば」を比較するに、後者のひきしまった固い感じのする語調を前者の如く、くだけた言い方に改めたものといえるであろう。

以上、地の文における「ござる」について、簡単に考察をおこなっ

た。口訳者が「雑談形式」の対話の中で「ござる」を選び用いた点は、「天草版平家」を特色づけるものといえよう。

b、会　話　文

「原平家」との対応を分類すれば、

一、「原平家」の「候」と対応八八例

例十八、（原）、「夜辺何となう世の物騒がしう候しを」（天）、ゆふべ何とやら世上が物騒がしうござったを、……などとよそに思て候へば、早成経が身の上にて候ひけり。（二〇九ぺ）はやそれがしが身の上になってござる。（三一ぺ）（少将→近習の女房達）「ござる」と「候」について、「口氏大文典」をみれば、「候」について「書きことば、書状に使い…」（六七八ぺ）とあり「ござる」について「話しことばのみに使はれる。」（五九〇ぺ）とある。この説明を考えあわせると、「天草版平家」は、口語的性格が強く、「原平家」は、文語的性格が強いことが考えられるであろう。

二、「原平家」の「なり」と対応七例

三、対応がなく添加したとみられる九例

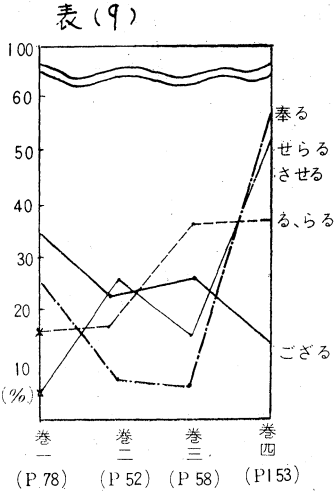
四、対応不明なもの六例

などがあげられる。

結　語

以上「天草版平家」の敬語法の主なものを「原平家」との対応部分のみに限って考察をおこなった。さらに、敬語法の体系について考察をおこなえば、各敬語の出かたに隔たりがみとめられる。表(9)は、主な敬語の使用数を、パーセンテージであらわしたものである。

表　(9)



この表からわかるように、尊敬語、謙譲語と丁寧語は、ほぼ逆の傾向であらわれている。従って、各敬語の性格から、「天草版平家」の前半は「雑談形式」に従って忠実に物語を展開し、後半は物語の展開に重点をおいて進められたのではないだろうか。ここに、「天草版平家」の敬語法の特性の一面が考えられるであろう。

また、巻二以後における「原平家」との対応関係、人物関係などの研究をおこなえば、「天草版平家」の敬語法の特性が、さらに明確になると思うのである。

注一、「ロ氏大文典」、ロドリゲス著、「日本大文典」のこと、一六〇四～八年成立。ここでは、土井忠生博士訳による。